

## 若年女性の暮らしの変化

——1970年代後半と80年代前半コーホートの比較

田中 慶子

(財団法人 家計経済研究所 研究員)

### 1. はじめに

「消費生活に関するパネル調査」(以下、JPSC)は、第16年度を迎えた2008年に、24～28歳の新たなコーホート(以下、コーホートDとする)を追加した。JPSCは、20代後半以降の女性(や世帯)の家計や暮らし、就業という多様な側面から同一個人を追跡していくことに主眼があることは言うまでもない。しかし同時に1993年の調査開始以降、1996年、2003年と新規コーホートを追加してきたことで、現在では1959年～1984年生まれまでと幅広い年齢層の女性が対象となり、同年齢に同様の質問をしているため、時代効果に注目したコーホート比較を行えるという強みをもっているデータとなっている。この20年間で女性をとりまく環境は大きく変化している。これまでもJPSCによって「均等法世代」などが描き出されて、社会構造の変化によって女性のライフコースがどのような影響を受けるのかが明かにされてきた。

今回、新たに追加したコーホートDは、1980年～1984年生まれ(以下、1980年代前半とする)であり、1974～1979年生まれ(以下、1970年代後半とする)のコーホートCとともに「ロストジェネレーション」(朝日新聞 2007)といわれ<sup>1)</sup>、豊かな時代に生まれ、バブル崩壊後の「失われた10年」に大人になった。卒業・就職・結婚・出産という「成人への移行」の時期を、持続的・長期的な経済停滞期のもとで過ごした戦後初の世代であるという点で特徴的である。1990年代以降の高学歴化や若年雇用環境の悪化、未婚化の影響などを

考えるうえでも、その動向が注目される世代である。コーホートDのこれまでのライフコースを概観すると、生まれた時はバブル景気であったものの、1990年代の低成長期に教育期を過ごし、好景気を知らない世代といわれる。18歳時点での進路も、高学歴化、とりわけ4年制大学への進学が急増し、2000年には女性でも4年制大学への進学が3割を超えた。短期大学への進学も2割近くおり、高卒後の進路が「就職から進学へ」と転換した世代である。しかし1990年代後半以降、若年層の雇用環境は厳しく、非正規化、雇用の不安定化が社会問題化した。学卒時の就職も「超氷河期」といわれ、(一時的に改善した時期があったが)就職も非常に難しい状況を経験した(している)世代である。また男女平等を意識だけでなく、教育などの実践においても幼少期から体得している世代であろう。そして、1990年代以降の未婚化、晩婚化、少子化という風潮の中で家族形成期を迎えており、生涯未婚率が女性でも2割を超えると予想されている(国立社会保障・人口問題研究所 2008)。

このようにコーホートDは、1990年代以降の日本社会の変化—幼少期から長期的な低成長・不況下にあり、進学や就業というライフコースの重大な選択の時期に、景気の変動、若年雇用環境の悪化という社会構造の影響が「直撃」した世代である。そのような状況が「成人への移行」のプロセスや、意識・態度にどのような影響がみられるのか、さらに今後のライフコースの展開が注目されるであろう。

図表-1 家族領域についてのコーホート比較

	コーホートD		コーホートC		比率の差	
	n	%	n	%		
配偶地位	未婚	399	62.7	418	60.3	2.4
	有配偶	210	33.0	257	37.1	-4.1
	無配偶・離死別あり	19	3.0	11	1.6	1.4
	有配偶・離死別あり	5	0.8	6	0.9	-0.1
	無回答	3	0.5	1	0.1	0.3
世帯類型	有配偶・夫婦のみ	57	9.0	50	7.2	1.7
	有配偶・夫婦と子	122	19.2	141	20.3	-1.2
	無配偶・親と同居	294	46.2	327	47.2	-1.0
	無配偶・単身	105	16.5	90	13.0	3.5
	その他(三世代同居など)	58	9.1	85	12.3	-3.1
両親の健在	両親健在	570	89.6	623	89.9	-0.3
	1人健在	54	8.5	65	9.4	-0.9
	両親死亡	0	0.0	1	0.1	-0.1
	無回答	12	1.9	4	0.6	1.3
母親就業	外で働いたことがない	141	22.2	182	26.3	-4.1
	5年未満	100	15.7	120	17.3	-1.6
	5年～10年未満	110	17.3	100	14.4	2.9
	10年～15年	77	12.1	110	15.9	-3.8
	15年以上	196	30.8	172	24.8	6.0
	無回答	12	1.9	9	1.3	0.6
親の年収	249万円以下	117	18.4	137	19.8	-1.4
	250万～499万円	118	18.6	127	18.3	0.3
	500万～749万円	138	21.7	126	18.2	3.5
	750万～999万円	92	14.5	103	14.9	-0.4
	1000万～1249万円	43	6.8	70	10.1	-3.3
	1250万～1499万円	14	2.2	25	3.6	-1.4
	1500万円以上	17	2.7	31	4.5	-1.8
	無回答	97	15.3	74	10.7	4.6
ライフイベント経験	なし	306	48.1	319	46.0	2.1
	1種類	165	25.9	204	29.4	-3.5
	2種類以上	165	25.9	170	24.5	1.4
	平均(0を除く)		1.8		1.7	
	家族・人間関係		1.9		1.8	0.1
	進路の変更		1.4		1.2	0.2
	経済的困難		1.7		1.5	0.2

そこで、本稿ではコーホート比較のための基礎的作業として、新しいコーホートDのこれまでのライフコースや「成人への移行」のプロセスという基本属性を確認することを目的とする。その際、1つ前のコーホートCと比較することで、あわせてJPSCにおける「ロストジェネレーション」内での差異を明らかにする。

## 2. 若年期の暮らしの変化

### ——コーホートCとDの比較から

JPSCでは、就業、消費、暮らしなど多岐にわたる質問を行っている。ここでは、家族（主に親子関係について）、学校から職業への移行、生活意識という3つの領域について、基礎的な集計にとどまるがコーホートによる違いを確認していく。前述のようにコーホートCは、第11年度調査（2003年実施）から、コーホートDは、第16年度調査（2008年実施）から追加された。初回調査の対

象年齢は、コーホートCは24～29歳、コーホートDは24～28歳であるため、ここではコーホートCは28歳までに限定して、比較を行う。コーホートCでは693名、コーホートDでは636名となる。なお、JPSCは母集団（国勢調査）に対し、地域（都道府県）、年齢（2区分）、配偶関係、無配偶の場合は世帯構成によって層化を行いサンプリングしている。回収が完了数ベースとなるため、コーホートによってサンプル数に若干差があるが、母集団の構成を維持しており、初回調査については全体の動向を反映しているものと考えられる。

### (1) 家族領域

対象者の家族に関する基本属性について比較する。集計結果は、図表-1にまとめて示している。最初に配偶地位については、未婚率でみるとコーホートDは62.7%、コーホートCは60.3%であり、2.4ポイント上昇している。JPSCでも未婚化の動向を確認できる。また、無配偶・離死別経験がある者が1.6%から3.0%とわずかではあるが増加している。コーホート全体の未婚化・晩婚化の動向とは別に、早婚で若年期に離死別を経験する層の動向が今後注目される。

次に、世帯構成をみると、コーホート全体に占める「無配偶・単身」と「有配偶・夫婦のみ」世帯が増え、「有配偶・夫婦と子」や「その他（三世代同居など）」など、子どもがいる世帯タイプの割合が減っている。ただし、無配偶のみで比較すると（図表は省略）、単身世帯は21.0%→25.1%に増加し、「親と同居」（含む三世代同居）は77.9%→72.2%に減少しており、未婚で親元に同居している「パラサイト・シングル」（山田 1999）は減少傾向にある。

続いて、両親の状況についてみてみると、いずれのコーホートも、約9割が両親ともに健在である。今回のコーホートDの回答で特徴的だったこととして、ケース数としては多くないものの両親（主に父親）の健在について無回答が増えていることがある（1.3%増加）。回答者本人の離死別だけでなく、回答者の親夫婦についても離死別したケースが増加していることが予想される。また、

回答者が20歳になるまでの間の母親の就業期間については、「外で働いたことがない」という専業主婦タイプが減少し、「5年～10年未満」や「15年以上」と母親が外で就労していたという者が増えている。コーホートCでは「働いたことがない」が最も多く、次いで「15年以上」がそれぞれ4分の1ずつを占めていたが、コーホートDでは「15年以上」が3割で最も多く、（一貫して）専業主婦の母親に育てられたという者が減っている。

昨年1年間の親の収入額（階級値）をみると、1000万円以上の層が6.5ポイントほど減少し、500万～749万円の層が18.2%→21.7%に増加している。1970年代後半の「団塊ジュニア」にあたるコーホートCの世代は、親元に同居し、経済的に豊かな親から経済的にも支援を受けている「パラサイト・シングル」が注目を集めたが（山田 1999）、コーホートDでは、年収1000万円を超える豊かな親は減少し、また未婚者でも親元同居の割合が減少し、1970年代後半に比べ1980年代前半コーホートでは、親子双方からみて「パラサイト化」していないことが確認できる。

回答者が、中学を卒業してから現在までの間に、本人や家族にネガティブなライフイベント（手術や長期療養を要するような重い病気や、退職・失業、離婚・別居などの10項目）の経験があったのかをみると、何も経験していない（「なし」という者が46.0%→48.1%）に増えている一方、2種類以上のライフイベントを経験している者の割合が増えている。とくにコーホートDでは4種類以上と多くのイベントを累積的に経験している者の割合が増えている。経験した出来事について、その結果どのようなことが起こったのか（複数回答）を、家族・人間関係の困難<sup>2)</sup>、進路の変更<sup>3)</sup>、経済的困難<sup>4)</sup>の3つに分類して比較してみると、いずれの経験（対処）も増えており、若年期において、本人もしくは家族のことでライフコースの変更や、対処を必要とするようなネガティブなライフイベントを経験した者が増えていることが推察される。

以上のように、親との関係を中心とした家族領域について2つのコーホートを比較すると、コー

図表-2 学校から職業への移行についてのコーホート比較

		コーホートD		コーホートC		比率の差
		n	%	n	%	
最終学歴	中学校	38	6.0	28	4.0	2.0
	高校	186	29.2	220	31.7	-2.5
	専門・専修	129	20.3	131	18.9	1.4
	短大	81	12.7	154	22.2	-9.5
	高専	1	0.2	2	0.3	-0.1
	4年制大学	190	29.9	145	20.9	9
	大学院	10	1.6	9	1.3	0.3
	その他	0	0.0	3	0.4	-0.2
	無回答	1	0.2	1	0.1	-0.1
中退経験	あり		10.4		10.0	0.4
学卒と初職	学卒前	67	11.7	66	11.4	0.4
	同時	457	80.0	476	82.1	-2.0
	学卒後	47	8.2	38	6.6	1.7
		571	100.0	580	100.0	
現在の就業	有職	474	74.5	493	71.1	3.4
	休職中	14	2.2	5	0.7	1.5
	学生	9	1.4	11	1.6	-0.2
	専業主婦	107	16.8	141	20.3	-3.5
	その他無職	32	5.0	43	6.2	-1.2
	専業主婦率 未婚有職率		48.6 90.2		53.4 88.1	-4.8 2.1
職務	常勤	310	64.2	310	62.5	1.7
	パート・アルバイト	124	25.7	132	26.6	-0.9
	嘱託・その他	49	10.1	54	10.9	-0.8
年取(万円)	常勤	285	274.9	288	284.4	-9.5
	パート・アルバイト	105	122.2	111	124.3	-2.1
	嘱託・その他	39	213.7	50	179.2	34.5
	全体	429	232.0	449	233.1	-1.2
月取(手取り) (万円)	常勤	280	18.0	303	17.6	0.4
	パート・アルバイト	109	10.0	114	10.0	0.0
	嘱託・その他	42	16.1	54	15.2	0.9
	全体	431	15.8	471	15.5	0.3
現職=初職	継続	207	32.5	215	31.0	1.5
期間中の就業	常勤・自営経験なし		25.3		17.0	
	すべて常勤・自営		45.2		50.8	

ホートDでは未婚化が進展しているが、その実態は「パラサイト・シングル」というよりも、親を経済的に頼りづらくなり、また子ども（20代後半女性）も離家しており、「非パラサイト」的な関係となっている。また、1990年代以降は、（景気の悪化と連動するように）家族関係の不安定化（離婚や子どもの虐待などの増加、一家離散など）も指摘される。JPSCをみるとネガティブなライフイベントをまったく経験しない人が増える一方、そのようなイベントを累積的に経験し、ライフ

コースの変更を余儀なくされるような対処を迫られる人もわずかではあるが確実に増えており、「家族のリスク化」（山田 2001）の兆候がみられる。

## (2) 学校から職業への移行

次に、学校から職業への移行についても、2つのコーホートを比較しながらみていこう。まず、回答者の最終学歴（中退は卒業に含まない）を確認すると、コーホートCでは、高校31.7%、短大

図表-3 生活意識についてのコーホート比較

		コーホートD		コーホートC		比率の差
		n	%	n	%	
生活満足	満足	101	15.9	85	12.3	3.6
	どちらかといえば満足	283	44.5	293	42.3	2.2
	どちらともいえない	173	27.2	197	28.4	-1.2
	どちらかといえば不満	59	9.3	87	12.6	-3.3
	不満	18	2.8	30	4.3	-1.5
	無回答	2	0.3	1	0.1	0.2
幸福感	とても幸せ	221	34.7	190	27.4	7.3
	まあまあ幸せ	300	47.2	359	51.8	-4.6
	どちらでもない	77	12.1	108	15.6	-3.5
	少し不幸	31	4.9	22	3.2	1.7
	とても不幸	4	0.6	12	1.7	-1.1
	無回答	3	0.5	2	0.3	0.2
階層意識	上	3	0.5	10	1.4	-0.9
	中の上	87	13.7	97	14.0	-0.3
	中の中	371	58.3	379	54.7	3.6
	中の下	145	22.8	157	22.7	0.1
	下	27	4.2	48	6.9	-2.7
	無回答	3	0.5	2	0.3	0.2
結婚意向	結婚が決まっている	27	6.5	27	6.3	0.2
	すぐにでもしたい	79	18.9	55	12.8	6.1
	いずれしたいが、今はしたくない	240	57.4	262	61.1	-3.7
	必ずしもしなくてよい	47	11.2	65	15.2	-4.0
	したくない	22	5.3	19	4.4	0.9
	無回答	3	0.7	1	0.2	0.5

22.2%、4年制大学20.9%の順となっていたが、コーホートDでは4年制大学29.9%、高校29.2%、専門・専修学校20.3%と、短大が大幅に減り、代わって専門・専修学校が増加している。コーホートによって最終学歴の構成が大きく変わってきていること、また高等教育への進学率、とりわけ大学が2割から3割へと増えていることが、今後の就業や結婚の趨勢にどのような影響を及ぼすのか注目される。

また回答者のこれまで通った学校での中退経験の有無をみると、いずれかの学校で中退経験がある者がコーホートCは10.0%、コーホートDは10.4%となっている。

学校から職業への移行のタイミングについては、いずれのコーホートも約8割が学卒と初職を同じ年に経験している。学卒前に職業が開始している者が（学生中にアルバイトを始め、中退して結果的に初職になっているケースなど）1割、学卒よ

り初職が1年以上後になっている者が1割という構成自体に変化はないが、前後どちらも初職と学卒の間隔が広まっている層が出現している。変化はわずかではあるが、先行コーホートでみられた「学卒と就職の同時性」が崩れてきたことが注目される。

次に、現在の職業の状況は、（休職中を含む）有職者が71.8%→76.7%と増加し、専業主婦が減っている。ただし、配偶別にみると有配偶に占める専業主婦率は、53.4%→48.6%となる一方、未婚者の有職率は88.1%→90.2%と微増にとどまる。つまり結婚後も就業を継続している層が増えていると思われる。また有職者に限定して職務についてみると、コーホートDでは常勤が62.5%→64.2%と1.7ポイントほど増え、パート・アルバイトや嘱託・その他は減少している。コーホートCの初年度では、派遣社員であるかを特定しただけでないため、比較は行えないが、コーホートDでは

有職者のうち、労働者派遣事務所の派遣社員は9.3%となっている。

収入について就業状態別にコーホート比較をすると<sup>5)</sup>、常勤では年収で10万円近く、手取りの月収でも4千円ほど低下している。パート・アルバイトでは、年収で2万円ほど低下しているが、9月の手取り月収ではほぼ変化がない。嘱託・その他では、年収が35万円ほど増加している。おそらく常勤と同様の働き方をする嘱託・その他（派遣社員）がここに含まれている可能性がある。ただし、手取り月収では大きな変化はない。

現職が、学卒後の初職である者は、いずれも約3割と変わらない。ただし、高学歴化に伴いコーホートDの方が学卒後から調査時点までの期間が、相対的に短くなる者が多いため、離転職の発生する確率という意味ではコーホートDの方が高くなるだろう。また18歳以降調査時点までに就業経験がある者の中で、全期間、常勤・自営<sup>6)</sup>であった者は、コーホートCの50.8%からコーホートDでは45.2%と半数を割り、一度は非正規を経験する者が半数以上になった。また期間中、常勤・自営経験が一度もない者は順に17.0%から25.3%に増加しており、若年層での非正規化が進展していることを確認できる。

以上のように、学校から職業への移行については、4年制大学進学増加による高学歴化、および学卒と就職の同時性のゆらぎ、一貫した常勤・自営という層の減少と不安定な就労の増加を確認できる。また常勤であっても年収が低下していたり、常勤・自営の期間が調査時点では1度もない者が増加していることなどから、コーホートD（2008年時点）の就業環境は、コーホートC（2003年時点）に比べ厳しい状況であることを確認した。

### (3) 生活意識

最後に、生活意識について比較する。ここでは、生活満足度、幸福感、階層意識、（無配偶のみ）結婚意向の4つについてみていく。まず、生活満足度では、満足（満足+どちらかといえば満足）が54.6%→60.4%と5%ほどではあるが増加しており、不満（不満+どちらかといえば不満）は

減少している。大規模調査でも（雇用環境の厳しさなどにもかかわらず）若年層の生活満足度が低下しない、むしろ高まっていることが指摘されているが（内閣府2009）、JPSCにおいてもその動向を追認する結果となった。幸福感についても同様に「とても幸せ」と最良の評価をする者が7.3%と大幅に増えている。また階層帰属意識についても「中の中」が増加しており、コーホートCと比べてコーホートDは（年収が低い、雇用が不安定にもかかわらず）現状に対して肯定的な評価をしていることがわかる。また、結婚意向についても「すぐにでもしたい」という者が12.8%から18.9%と増加し、積極的な結婚意向を示している。

以上のように、コーホートCに比べコーホートDでは、一般的に肯定的な生活意識をもっており、他の調査と一致するような結果となっている。コーホートCの調査時点（2003年）に比べ、コーホートDを追加した2008年は（その間、一時的に景気回復を経験したものの）、若者の社会的支援の必要性が広く訴えられるなど、若年期をめぐる環境は決して楽観的な状況ではないにも関わらず、若年期の女性自身は、生活意識の上では肯定的になっており、従来の生活意識を規定する条件とは異なる構造がある可能性を示唆している。

## 3. まとめ

本稿では、新規に追加したコーホートDの基本属性や「成人への移行」を、コーホートCとの比較をしながら確認し、JPSCの「ロストジェネレーション」内での差異をあきらかにすることを目的とした。2003年と2008年という2時点で社会経済的環境は変化しており、その点を十分考慮する必要はあるが、JPSCからは1980年代前半コーホートの特徴として、次の4点をあげることができる。①親の年収が低下し、子ども（対象者）も離家して単身世帯が増えるなど「非パラサイト化」している。②最終学歴が高学歴化しており、4年制大学もしくは専門・専修学校が増加している。③非正規での就業が増え、20代後半までに一度は非正規での就業を経験する者が半数になっている。

④生活意識は非常に肯定的で、結婚意向も強いことである。今回は、単純な比較に留まるが、今後はこのようなコーホートの特徴をふまえつつ、これから彼女たちが結婚や出産、職業キャリアの形成を迎えていくなかで、どのようなライフコースを進むのか、年長コーホートとライフコースとはどのように異なる/異ならないでいくのか。今後の調査で追跡していくことができるだろう。

注

- 1) (2007年時点で) 25歳～35歳 (1972年～1982年生まれ)の世代をさす。
- 2) 「家族内の人間関係がうまくいかなかった」「精神的に落ち込んだ」「離婚・別居などで家族がわかれた」の3項目。
- 3) 「進学をあきらめたり、休学・退学した」「自分が新たに働きに出た」の2項目。
- 4) 「収入や資産が低下」「家族の誰かが働きに出た」「親戚などに援助を頼んだ」「土地・家屋を売った」「金融機関から借金をした」の5項目。

- 5) 数値は実数で調整を行っていない。
- 6) 本稿では安定的な職業であるという点から、常勤と自営(家族従業を含む)をひとまとめにして扱う。

文献

朝日新聞「ロストジェネレーション」取材班, 2007, 『ロストジェネレーション——さまよう2000万人』朝日新聞社。  
国立社会保障・人口問題研究所, 2008, 『日本の世帯数の将来推計(平成20年3月推計)』。  
内閣府, 2009, 『国民生活に関する世論調査』  
(<http://www8.cao.go.jp/survey/h21/h21-life/index.html>)。  
山田昌弘, 1999, 『パラサイト・シングル時代』筑摩書房。  
——, 2001, 『家族というリスク』勁草書房。

たなか・けいこ 財団法人 家計経済研究所 研究員。  
主な論文に「若年層の家族意識は保守化しているのか」(SSJDA『家族形成に関する実証研究』, 2007)。家族社会学専攻。(tanaka@kakeiken.or.jp)